

# 住まいに登場したオランダのタイル

Delft Tile

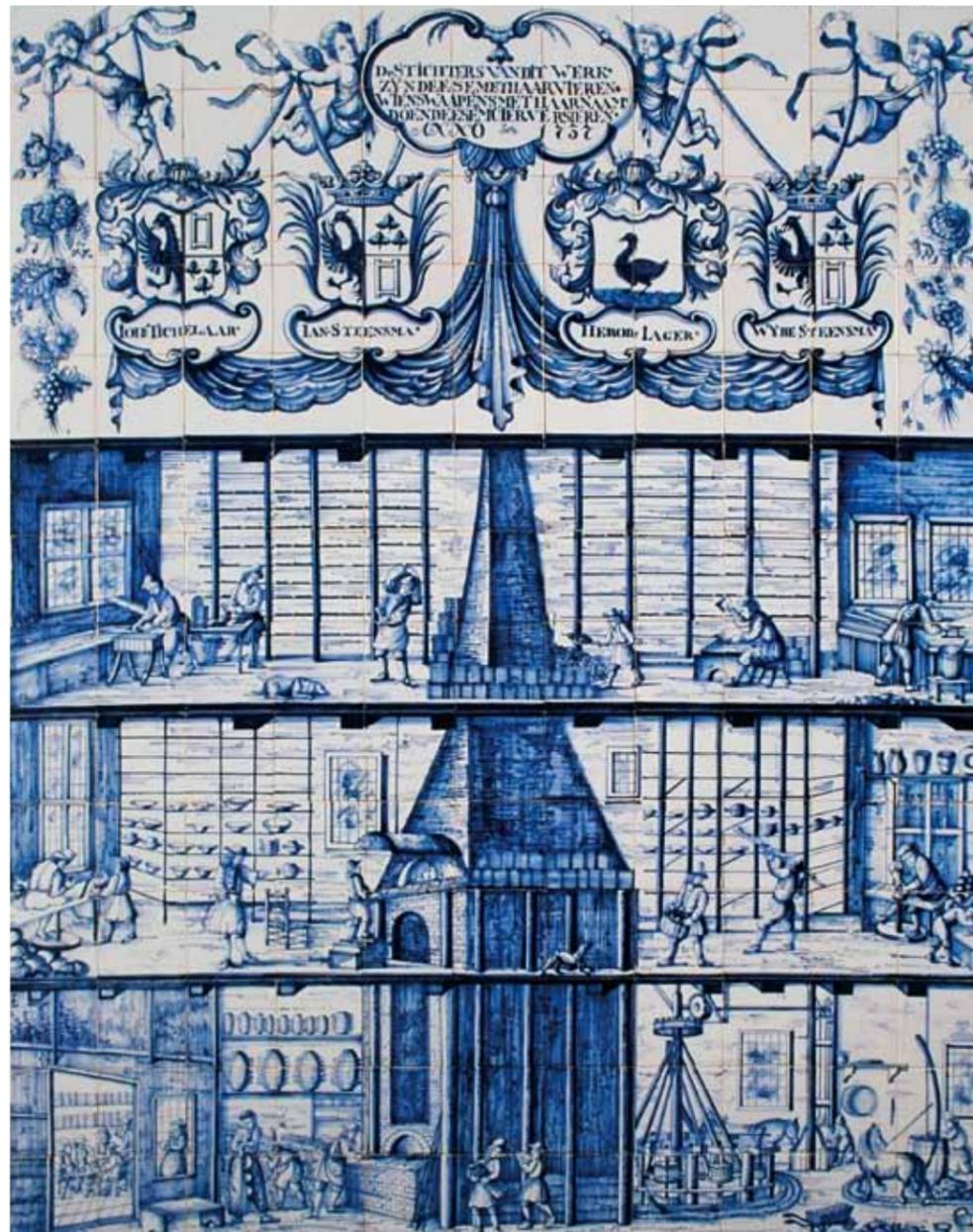
author 竹多 格 | Itaru Takeda

ただいだたる — INAXライブミュージアム主任学芸員/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(現・INAX)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

## [クローズアップ・タイル]

### 18世紀のタイル工房を描いた陶壁画 — 1

この陶壁画は、オランダのアムステルダム国立美術館に収蔵されているタイル絵を複製したもので、フリースラント窯(1737年創業)でのタイル製造の様子が描かれている。国立美術館にあるオリジナル版は、ハーリンゲンのボルスワルト窯で製作されたものだが、この複製は、1978年、現代の原材料を用いて、マッカムのティシエラー窯が製作し、アンノ・ハウテマによって絵付けされた3点のうちの一つである[20世紀/1,630×1,530mm、154枚組/オランダ]



## [タイルのデザイン]

### タイルの図柄 — 2-5

当時の風俗画の隆盛に影響を受け、人生訓など寓意性を持たせた子どもの遊びや、動物、チューリップ、水辺の風景、市民、兵士、船など、世相を反映した図柄が多数描かれた

2—白地藍彩チューリップ文タイル[17世紀/130×130mm]|3—白地藍彩風景文タイル[18世紀/130×130mm]|4—白地藍彩人物(子どもの遊び)文タイル[18世紀/127×127mm]|5—白地マンガン彩東インド会社帆船文組絵タイル[18世紀/385×255mm、6枚組]|いずれも制作地はオランダ

## [タイルのある風景]

### 装飾性と実用性を備えて住まいに登場したタイル — 6,7

オランダでは、木造に代わってレンガ造の建物が登場し、しっかりした下地にタイルの施工が可能になり、地下室や居間、台所などにタイルが張られて室内を飾った

6—「ヴァージナルの前に立つ女性」幅木にタイルが採用されている(フェルメール作/1670-72頃/©The National Gallery, London)|7—オランダの民家の暖炉まわり(世界のタイル博物館1階の再現コーナーより)



- オランダは、刻苦勉勵を徳とするカルヴァン主義や強力な艦隊のおかげで、16世紀末には、ヨーロッパで最も強力な通商国のひとつになった。交易に便利なように水辺に都市が発達し、経済的な繁栄を誇っていた。市民生活も豊かになり、タイルは初めて住まいに使用されるようになった。
- オランダのタイルの源流は、16世紀の初頭、ネーデルラントのアントワープにイタリアの陶工が移住し、制作を始めたマジョリカ(=錫釉色絵)風の陶器やタイルにさかのぼることができる。オランダの窯業地デルフトは、1602年設立の東インド会社によってもたらされた中国の青花磁器(白地にコバルトブルーで絵付けしたもの)の影響を受けた陶器やタイルの生産で繁栄した。代名詞にもなった「デルフト」は、やがてヨーロッパ各地にも波及し、17-18世紀におけるブルー&ホワイトの大流行を引き起こした。
- オランダのタイルの図柄は、中央に描かれる主題と四隅に描かれる模様から構成されている。初期には、菱形や丸形、星形などの囲みの中に主題が描かれたが、やがてこの枠がなくなり、それが四隅に集約されて「コーナー・モチーフ」と呼ばれるオランダタイル独特のデザインとなる。コーナー・モチーフには、ホセコップ(牛の頭)、スピネコップ(蜘蛛の頭)など独特なもの、他、ユリ文、卍(雷文)などがある。やがてこれらのコーナー・モチーフも次第に小さくなり、主題が中央に強調された絵柄に変わっていく。
- この時代に活躍したオランダの画家、フェルメールの人物画には、当時の部屋の様子が細かく描写されている。「ヴァージナルの前に立つ女性」や「ミルク・メイド」では、壁と床の取り合い部分に、幅木としてタイルが張られている様子が描かれている。海拔ゼロメートルといわれるオランダは、浸水の被害も多いため、タイル製の幅木は土壁を守るのにも役立った。また、地下につくられることの多かった台所や食堂は湿気が多く、家屋を守るためにも壁のタイル張りが進んだ。水洗いの容易なタイルは、清潔好きなオランダ人には欠かせない建材となり、腰壁に張られたブルー&ホワイトのタイルは、白い壁にアクセントとして映えるため、そして暖炉には煤をふき取るのに容易で耐火性もあるため多用された。

ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。